内閣情報部編輯

寫眞週報

特輯

皇軍戰

4

13・3・9

10セン

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

國産純

いすゞ

東京自動車工業株式會社

資本金　貳千七百萬圓
從業員　六千名

營業種目

陸軍保護自動車
商工省標準車
薪炭自動車
ヂーゼル自動車
其他各種

本社……東京、東品川
製造所
鶴見……横濱鶴見
大森……東京、大森
川崎……川崎大師河原

皇國興亡の秋に当り
日本人たる
誇を以て
(東京十五年一月三日)

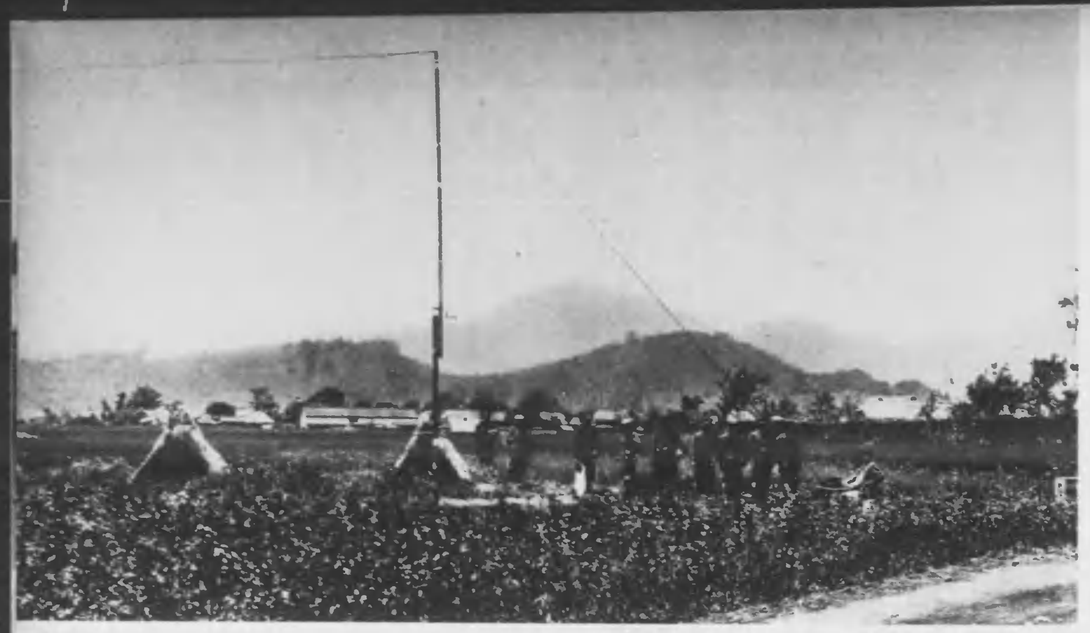
皇軍賛歌

血を分ち
夢を共にする
父祖の
今、父祖と共に生きる喜びに
回顧し、自己の責任の
誇を感じ、
陸軍省

西南役

⇨城山から鹿兒島市街櫻島を望む。生々しい土塹壕地が西南役跡を物語り鹿兒島灣内には古風な官軍勢の軍艦が浮いてゐる。

⇨藤崎台附近に急設された假兵營。驚ぶきの原始的な兵營に我等の父祖は屯した——今日兵舎は立派になつたが、その中にすむ兵の傳統の忠君愛國精神はいさゝかも變つてゐない。



⇦熊本二本木附近の通信所。當時戰闘の殷も近代的な部門を擔當した通信士は「ロツク」に山高帽姿であつた。後方の低い山は花岡山。

⇦軍團砲兵部に充てられた衛戍病院の正門。

昔を思ふて今に備ふ

非常事變下の陸軍記念日に當ひて

陸軍少將　櫻井忠溫

ア、三十四年、——日露戰爭から既に三十四年といふ長い日が經つた。當年この役に參加した勇將も多くは世を去つたであらうし、猛卒として今日を回顧する者果して幾人あるであらう。

ましてや、西南、日清役の人といふと、多くは彼の彼方へ去つたであらう。今日より思へば、日清役は四十四年、西南役六十二年の昔であり、半世紀以前、或はそれに近い時代の戰爭であつた。

しかし、たとひ百年二百年を經ても、この三役は忘れられないものとなつて國民の頭に殘るであらう。

それだけ深刻であつた。日露戰爭の如き「勝てるいくさ」と思つてゐなかつた。武器は劣り、兵數は足らず、理として勝てる戰さでなかつたのだ。それが勝つた。山縣の「兵の勝敗は器に非ず、人に存す」といふ語を實際に證據立てた戰爭であつた。「人」——が勝つたのだ。魂のみがかうさせた戰爭だつたといつてよかつた。

世界の人は、恐らく何人も、日本の勝利を信ずるものはなかつた。車輪に止まる鯉の如きものとすら言つた。その比喩がアベコベになつたので世界の人はヒツクリ返つて驚いた。

カイゼルさへ、歐洲大戰前には、しきりに日本人魂を研究させたくらゐだ。日清戰爭ですら、彼には機關銃があつた。戰たれてみて始めて昔を聞いたのだ。そればかりであつた。しかし、機關銃の前にも平然としてゐた。そして、疾風の勢を以て、敵を追ひまくつた。彼は枯葉の如くチンヂバラ／／になつた。以來、支那兵といふと、逃げる兵隊の標本のやうに言はれたものだ。

西南役は、全く肉體の戰爭といつてよかつたが、強靭の如きは、肉を以てコンクリートにブツつかつて行つたのだ。しかし、その堅壘に向つても、日本魂は一大爆藥となつて見事に之を破つた。一人間の造つたものを人間が破れないといふ道理はない」といふ魂がさうさせたのだ。トーチカに突入する勇士を見てもさうだ。神業としか思へないことを立派に爲し遂げてゐるのだ。

× ×

「自分は死んでも、自分の死骸を乘り越えて進む者がつゞいてゐる」——この信念がある。自分一代で成し遂げられなくても、次の時代、又次の時代が完成すると信じてゐる。

「戰場の人には、自分でやれなくても、つゞく者がある」と思つてゐる。死は恐れない。死以上のものがある。それは「如何にもして敵に勝たねばならぬ」といふことだ。突撃する。仆れる。次、次次と、戰友の屍を乘り越えて行く。一人斃れ、二人斃れ、三人、五人斃れても、一人でも取りつく。その一人が二人となり、五人となり十人、百人となつて突撃する。

西南役に、日清役に、又日露役に戰つた人たちのその魂が、シベリア事變にも、滿洲事變にも、今の支那事變にも働いてゐるのだ。今日の人の力のみではない。何十年——何百年と增つて來た力が今日の大きな力となつてゐるのだ。

戰場の人も、必ず／／先人の偉跡を偲び、眼先の血の歴史を繰り返りながら戰つてゐるだらう。そこに底知れぬ勇氣が湧き、已れの背後より幾千萬とも知れぬ人の力強い「あるもの」が積いて來ることを感じてゐるだらう。

日露戰爭當時、世界の軍事評論家は「この戰役に於て日本軍の威力は最大限に發揮された。しかし、これが恐らく絶頂であらう。今後再び、かやうな日本軍を見ることはなからう」といつた論に一致した。

それがどうであらう。滿洲事變に大にその威力を發揮し（當時有力な某大將が、日露戰爭より強いやうだといつたことがある）今回の事變に於て、更に大威力を揮つた。「日本軍の將士は何ものか目に見えぬ力で支配されてゐる。それは不思議な力だ。これではどこまで強いのか見當がつかなくなる」と評したものもある。「目に見えぬ不思議なもの」それは、と、言ふまでもない。

× ×

「命を惜まない。死を輕んずる」だけでは日本人の何たるかゞ現はれて來ない。「人間は生れ變るものだ」といつたやうな支那兵うたりにある迷信が、さうさせるのではない。

「自分の命は——天皇陸下に捧げてある。陸下の御ためにー心忠節を致すのだ」——といふ、日本人のみが持つこの觀念によつてこそ、戰場に死して悔ゆるところがないのである。念々、陸下の御ため、といふことを忘れたことはない。それであればこそ、笑つて死地に臨むことが出來るのである。死は羽毛よりも輕い。たゞ志は君國にのみ存す、これである。

今日戰場に樹つ軍旗の多くは、西南役以來風雪にさらされ、硝煙を浴びてゐる。色は褪せ、破れてゐる。そこに勇士の血の跡があり魂が宿つてゐる。

日本軍人は、軍旗の樹つところに、天皇陸下が在します、と信じてゐる。軍旗の下に戰ふことは、陸下の御馬前に在ると同じ思ひでゐる。戰場の人は——天皇陸下を中心にして、そこに戰ひ、且つ僵れることを以て、無上の名譽としてゐる。

軍旗に對する尊い觀念は、それが直ちに日本軍が絶大絶上の軍隊世界比類なき軍隊なり、といふことが出來る。

× ×

戰爭は、銃後の人の力に俟つべきものが頗る大となつた。近代戰は殊に然りである。第一線も第二線もなくなつてゐるのである。

日清役より引つゞき、今日に至るまで、我國民は、完全に銃後の務めを盡してゐる。日露戰爭當時の思出から考へても、全國民が一心結束して難關に當つた。異心を抱くものは一人もなかつた。

戰爭は寧ろ第二線に重點を置かねばならない時代が來てゐる。銃後の固き護りあれば、國家總動員も、長期作戰もすべて解決されるのである。

今や皇軍は、必死の奮戰をつゞけてゐる。永遠の太陽は昇り始めんとしてゐる。しかし、四圍の形勢を察する時、われ／／は一寸の慢怠をも許されない。われ一歩退けば、彼は十歩を進み、十歩退けば三十歩を進むであらう。最も緊張を要する時だ。

この時、この際、過去戰役に於ける先輩の偉勳を偲んで、われわれの覺悟を新にすることは大なる意義がある。地下の人も必ず、われ／／の眼前に嘲笑してゐるだらう。

ア、三十四年、日露戰爭からでも既に三十四年。しかし、思へばまだ昨日の如き感がある。

アジア歴史資料センター
Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

日清戰爭

⇧ 虹口瓦塞の閑院宮殿下。
左から御五人目は閑院宮殿下（當時少佐で在せらる）次いで桂太郎第三師團長、木越安綱歩兵中佐（參謀長心得）（明治二十七年十二月）

⇨ 榮城縣龍嘴灣に陸揚される第二師團の輜重、綠の下の力持ちともいふべき後方勤務隊の任務は實に重い。

⇦ 台灣征討、自慢の狙撃砲で布陣、奮戰する我が將士。炎天下、白づくめ白脚絆である。

⇨ 新軍旗を捧げ歩武堂々進軍する台灣征討部隊。

⇦ 金州城内で會合した第二軍司令部將校、同相當官及び高等文官。中央大山第二軍司令官、その左は參謀長井上少將、後の大將）藤谷少將、伊知地參謀。（明治二十八年四月二十八日）

⇦ 平壤の傷病收容所。靄然たる我が監視の兵にひき比べ、白日の下にあはれな身を曝してゐる支那兵は今も昔も變りがない。

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Redords
http://www.jacar.go.jp/

日露戰爭

⇦ 我が二十八サンチ榴彈砲ではじめて破壊された東鶏冠山北砲台鬼哭部落（ヒロ）附近右方の大砲は克魯伯野砲で、敵は退却の際閉鎖機を外してゐる。中央は我が占領寸前まで我軍を苦しめた機關砲。左方に見える營舍はコンクリートで固めた二階建の陣地で、敵は退却の際に自ら爆破した。又營舍も一部の土囊は我軍が占領後防備のため築いたものである。（明治三十七年十二月二十四日）

⇦ 我が歩兵第三聯隊第八中隊の塹壕地から見たクロパトキン保壘。（明治三十七年十二月六日）

⇦ 旅順郭家溝東方高地で陸軍の攻撃に協力する海軍陸戰隊。

⇦ 「庭に一本桑の木」あまりにも有名な水師營の會見。中央乃木大將、ステッセル中將を囲んで横列右から、當時の渡邊少佐、松平大尉、ニューベルスコエ中尉、安原大尉、通譯の川上貿易事務官、中列右端は伊知地少將、左端はレース少將、前列津野田大尉、マルチエンコ中尉。（明治三十八年一月五日）

⇦ 岡山子北方高地の麓で砲撃準備整つた二十八サンチ榴彈砲。この巨砲一度開いて、旅順の生死を拒する東鶏冠山が陥落した。要塞に据え付けてあつた巨砲を内地から運んで攻城砲として用ひたことは、世界戰史最初のことであつた。（明治三十七年十二月十七日）

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

日露戰爭

⇧ 各營に備へ南十里河で木炭を製造する第三師團糧餉部（明治三十七年十一月二十九日）

「キミンスイ」西北方高地で壯烈に攻撃中の近衛歩兵第三聯隊第六中隊。三聯隊第六中隊の火輪構築は各個の間隔が四歩も現在歩兵の火輪構築は幼稚だつが、機關銃その他兵器が幼稚だつ六歩もあるが、機關銃その他兵器が幼稚だつた當時ではかうした密集隊形に近い散兵の仕方で、部隊長その他の姿勢も思ひ切つて高いのが注目される。（明治三十七年八月二十五日）

奉天街道紅綾堡で架橋作業中の第四師團工兵第四大隊第一中隊。飛び來る彈丸を身に浴びながら友軍渡す橋を架ける工兵隊の努力は今も昔も涙ぐましいものである。（明治三十七年十月十九日）

第三軍司令官乃木大將と聯合艦隊司令長官東郷大將の歴史的會見。

（前列右から、金子海軍大佐岩村團次郎（現在中將）工兵部長、第三軍司令官隨軍大佐鈴木貫太郎（後の中將）軍醫監、第三軍司令官乃木希典、聯合艦隊司令長官海軍大將東郷平八郎、第三軍參謀長伊知地彦介（後の中將）經理部長、主計監陸軍少將吉田太治、軍參謀副長歩兵中佐大庭二郎（後の大將）

中列右から、軍副官砲兵大尉曾根嘉吉（後の少將）海軍大尉伊集院俊（後の大將）軍參謀中佐秋山眞之（後の中將）海軍少佐飯田久恒（後の中將）海軍中佐秋山眞三（後の大將）海軍大佐黒井悌次郎（後の大將）支部課報係歩兵中佐白井二郎（後の中將）支部課報係歩兵中佐奈良武次（後の大將）軍參謀歩兵少佐白川義則（後の大將）軍參謀歩兵大尉長谷川清（後の大將）軍參謀歩兵大尉長岡外史（後の大將）軍參謀歩兵大尉鳥居民（後の大將）軍參謀歩兵大尉安原隆次郎（後の少將）軍副官歩兵大尉鳥越一郎（後の中佐）軍副官歩兵大尉秋平英夫（後の中佐）山田伯爵（後の中佐）軍副官歩兵大尉秋山好古（後の大將）陸軍大尉河西豊一（後の中將）高級副官歩兵中佐吉岡友愛（後の大佐）歩兵大尉津野田是重（後の少將）軍管理部長砲兵少佐渋谷遵（後の大佐）（明治三十七年十二月二十日）

一人一人の俘虜に宣誓書を讀みきかす。ぞろ〳〵と列をつくる俘虜たち、服裝もまちまちなら抱く精神もばらばらだ。（明治三十八年一月五日）

奉天入城式　大山總司令官の入城を南門内に迎へる第二軍諸部隊（明治三十八年三月十五日）

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

第三撃によつて撮影された大東亜戦争開戦第一カポニエール」
（昭和三十七年十一月廿六日）

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

歐洲大戰參加

シベリア出兵

⇨ 雪の進軍氷を踏んで
モゴーチヤの雪原を進む我軍
（大正八年五月十八日）

⇧ 張村に向け出動せんとする我モリス・ファルマン機。
これは、實戦に參加した最初の我軍用機で、プロペラは主翼の後ろに、南翼の間には蜘蛛の巣の様に針金を張り――かうした幼稚な飛行機であつたが、それでも砲弾やうの爆弾を搭載して果敢な攻撃を試みた。今次事變に活躍する我荒鷲に比べると眞に今昔の感に堪えぬものがある。
（大正三年十月三十一日）

⇨ 青島より凱旋の途に上る獨立第十八師團長神尾中將
凱旋將軍を迎へる自動車はこれでも二十四年前の當時では最新型であつた。
（大正三年十二月二十日）

⇨ チタ飛行場に待機する我がソツピース式機。
飛行機の進歩は青島攻略戰當時のモリス・ファルマン機から僅か六年間にこの様な、今の戦闘機にほぼ近い形を備へたものになつた。たゞモリス・ファルマン機は佛國製、ソツピース機は英國製であるのに反し、今日の我荒鷲は凡て國産機であるのが力強い。
（大正九年五月十五日）

⇨ 一見木彫りの様な豚
零下四十度の酷寒にコチ〳〵に凍つた豚はかうして鮮魚にして配給された。

⇨ 出動待機の姿勢をとる當時の我が裝甲自動車隊、現在のものに比べるとはるかにつくりが大きく背も高く又流線形に角度を曲げて彈をそらす設備も施されてゐない。

⇨ 傳書鳩もシベリアの戰野に活躍。
白凱々の雪原に苦闘する皇軍を援けて通信連絡の重い任務を果した可憐の鳩は今も支那の曠野に目覺ましい活躍をつゞけてゐる。

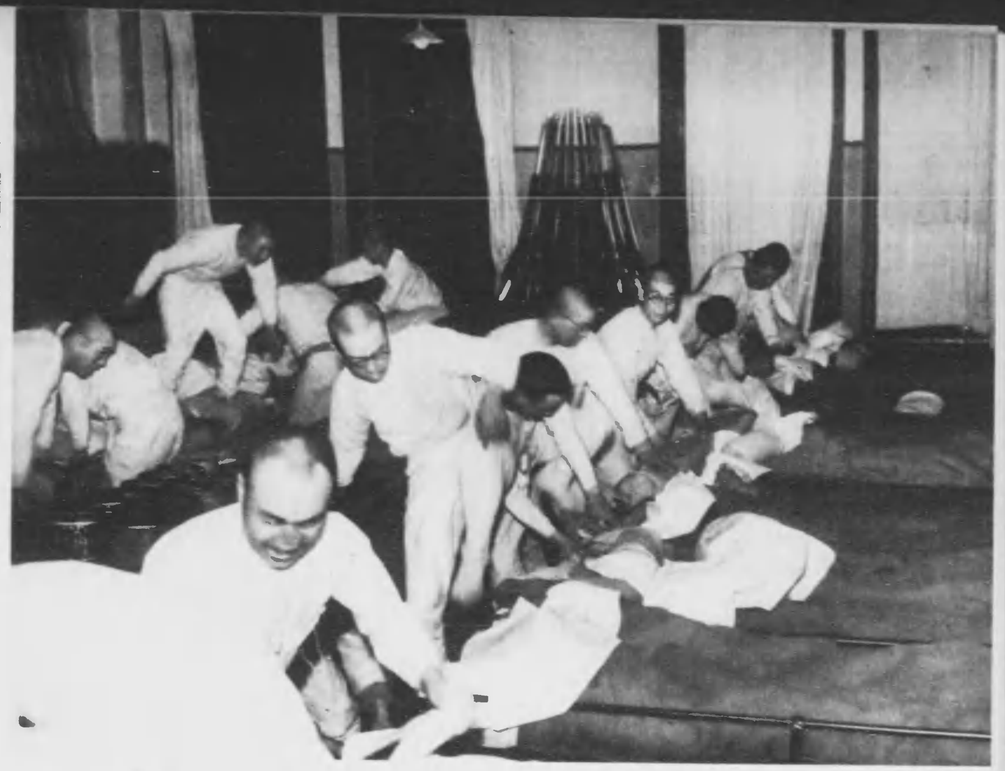
陸軍記念日に就いて
「週報」第七十三號
本號と併讀せられよ
（三月八日發行）

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

兵年初の下変事！刺溌

起床喇叭！　こいつは、目覚時計を、溝圍の中へ抱きこむやうにはゆかぬ。新兵さんは猛然と毛布を蹴つて立上るが、未だ見開けぬ瞳の奥には、たつた今迄見てゐた夢の映像が殘つてゐるのだ。おい！　俺の袴に、足を突つこむな！　はッ、班長殿、失敬したであります！　一瞬し、戦時下新兵さんの心構へは、遺憾一分間で、悠々洗面を待つ。

食ひ方初め！　熱い麥飯に、熱い味噌汁をふうふう吹いて　すくすくと伸びる標の若木、新兵さんに三度の食事は、何より美味く樂しみだ。ほう、今朝は、朋に納豆もあるぞ！　強靭な意志と、彈丸のやうな肉體は、斯うして、十分な榮養を基に培はれてゆく。



營内

鋼鉄の斷かな音を響はして、鳴りひびく起床喇叭。一瞬の規律は、爽かな音色となつて、一章の魂を呼び覺ましてゆく。全國兵營の五時半、我等の若き兵士は、新しい今日に向つて、ガバとはね起きる。金色の喇叭に雲の影が流れて、薔薇色の朝が東を染め初めた。今日もいい天氣！　覺めよ、覺めよ、と、起床喇叭は鳴りわたる。

さつと擧げる手。尊敬と信頼をこめてぢつと見詰める目。擧手の礼は、颯爽として傍の見る眼も快い。

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

野外

未だ足並、手並は揃はぬが、だツ、だツと、大地を踏む軍靴の力強いリズム。一、二、一、二。此の新兵さん達も、機械のやうに整然と美しい行進の隊列に加つて、街頭に英姿を現すのも、もう直ぐだ。

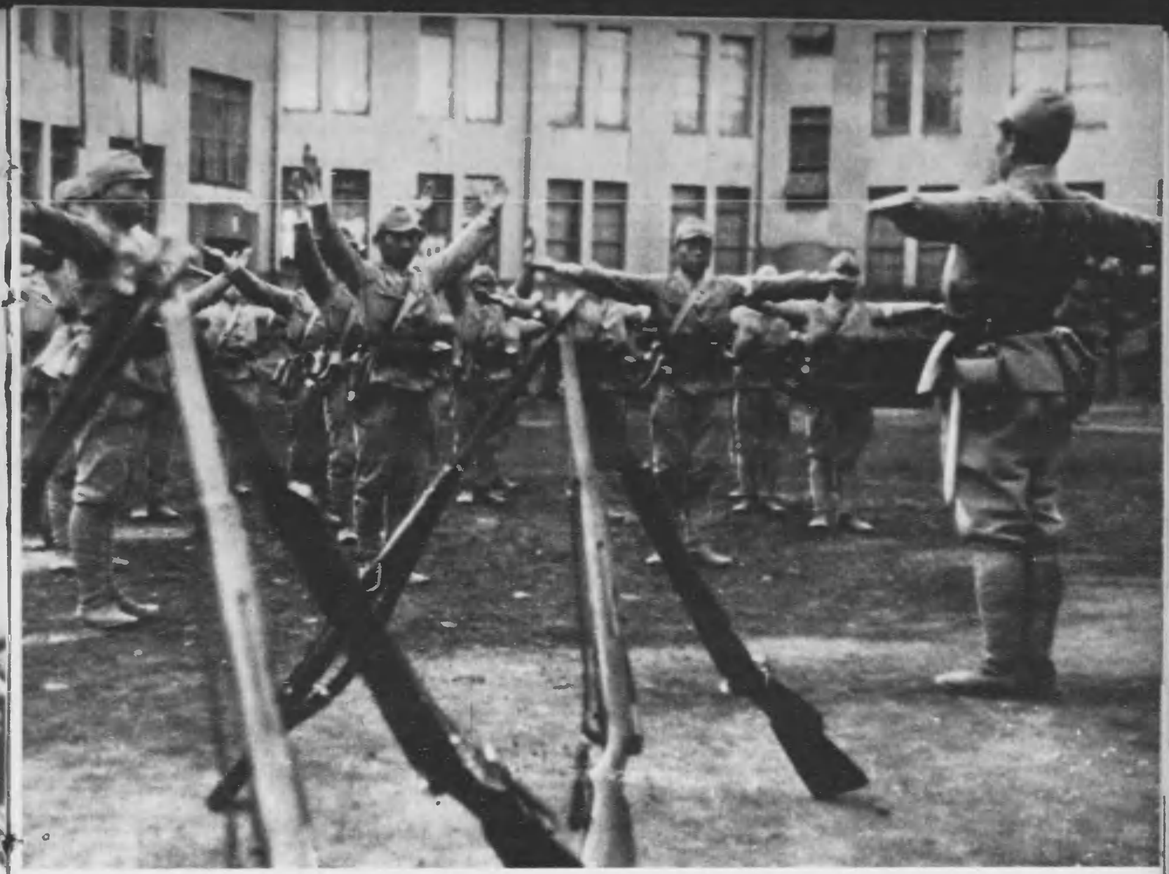
攻撃戦ともなれば、縦横に掘られた壕を跳り越えて——

歩兵戦の精華、我等の陸軍が世界に誇る、突撃！ 實戦宛ら銃把もつぶれよと捉りしめ、喊聲諸共、鐵網を躍り越えて、突き進む。若き兵士の笑顔——もう、御國の爲に莞爾と笑つて死ぬる覺悟の出來た笑顔だ。

怒濤の如く殺到する敵軍へ、銃身も灼けよ、と撃つて、撃つて、撃ちまくる。一分間に二百發、小銃十五、六挺に匹敵する輕機關銃は、新兵さんの大きな魅力だ。

銃劍の穂先に凝結する闘志。引金を握つて、ぐつと前方を睨むと、大陸の戰場に斃れた友の姿がちらつく。（銃よ、今に實彈をこめてやるぞ！）繰ひも繰々しく堤防利用の射撃練行演習は、滿點の成績だ。

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Redords
http://www.jacar.go.jp/



⇧ 演習終つた後の調節運動——ぐつと手を伸ばして、深々と吸ひこんだ空氣が、何處からともなく流れてくる夜の御馳走の匂ひを含んでゐた。ぐう、と腹が鳴る。思はず、運動を忘いだ途端に、「おい！遅つとるぞ！」と班長の一喝。寫眞にようく、御目とめ下さい。

これからの戰爭は科學戰だ。兵器の種類もふえた。精密な自働火器に關する學科の時間も多くなつた。輕機關銃のバネ一箇も見逃すまいと見つめる目、先輩の說明に傾ける耳、——此の輕機が、伸び育つ若い兵士に抱かれて、對敵膺懲の火を吐く時は何時？

「南京攻擊の際は、裸足に皮片をまいて進軍したそうだな。」「そりや、何の話だい？」「編上靴が破れてさ、紐のやうになつたんだつてよ。」一日の教練を終つて、ほつとした夕食前の一時、足が第一の歩兵だ、戰地にある先輩の勞苦を偲びながら、重い軍靴をせつせと磨く。新しかつた靴にも個性が出てきた。間も無く、靴も一人前になる。

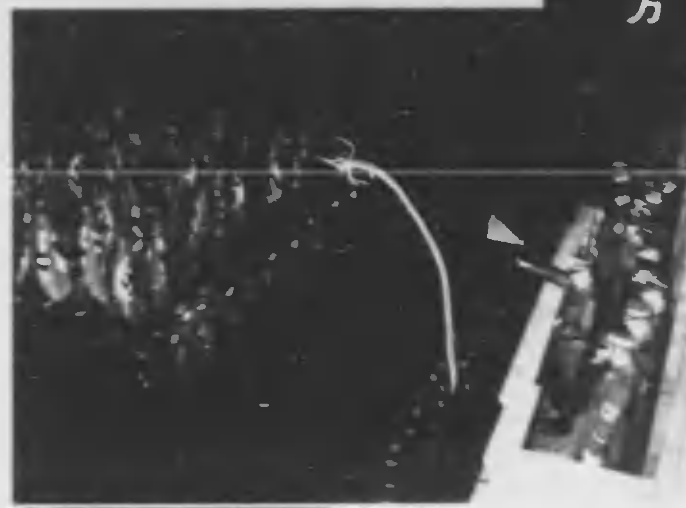
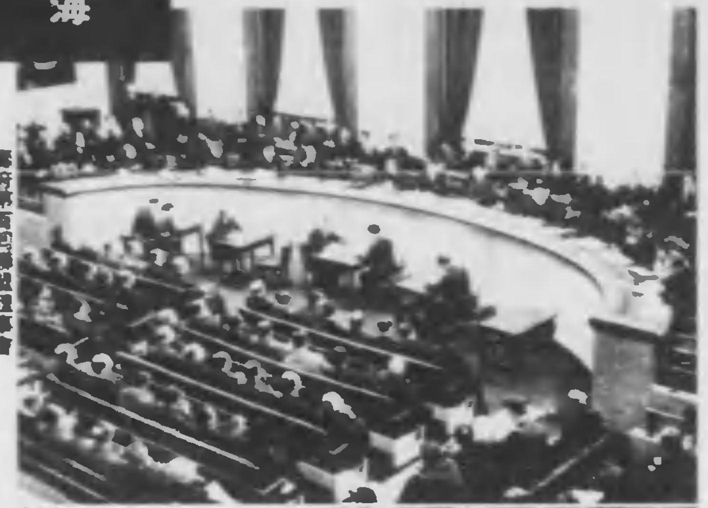
崇高なる皇軍精神は、ゆるぎなき不動の姿勢にある。「氣を付け！」の命令一下身じろぎもせぬ新兵さんの頼もしい姿。その胸に、その眼に、烈々たる氣魄が窺はれるではないか。

斯うして、饅の粗織、友愛に結ばれた共同生活の中で、無敵皇軍の成員となり、優れた社會人となる成長の一日は終る。八時の點呼が終つて、故郷のはらからに手紙を書けば、間もなく、消燈喇叭だ。安らかな眠り、——一日の教練に疲れた身體は、直ぐ深い眠りに落ちてゆく、何を夢見るか、陽灼けした頰には微笑さへ泛べて——

演習の後

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

海の彼方

寿府第百回聯盟理事會

第百回國際聯盟理事會は去る一月廿七日寿府で開かれたが、席上イギリスのイーデン前外相は聯盟理論支持を再び表明した。デルボス佛外相、ソ聯リトヴイノフ外務人民委員等の顔も見える。

伯林の大炬火行進

ナチスの政權獲得五周年を祝ふ、炬火行進が今年も一月卅日夜ブランデンブルグ門からウイルヘルム街を通つて、總統官邸バルコニーから閲見するヒツトラーの前に炬火に映えるナチス軍旗も華々しく展開された。

全伊ファシスト義勇軍大會

かの歴史的「羅馬行進」に始まつたファシスト革命成つてこゝに十五年、第十五回ファシスト義勇軍大會に際しムッソリーニ首相はコロシウム廣場で伊太利の世界に於ける立場を强調、全會員を激勵した。

上海に到着した新駐支英大使

ヒューゲッセン駐支英大使の負傷後、英大使のポストは空席でハウ參事官が代理、接衝をつとめてゐたが、この程アーチボルド・クラーク・カア卿が新らしく赴任した。

支那機の空爆處をえらばず

血迷つた支那飛行士の盲爆撃は所きらはず蚌埠の伊太利教會、佛メソヂスト教會をも見舞つた。寫眞は早速皇軍衛生班の手厚い看護を受ける負傷した尼僧たち。

綿業會議開會を宣するファルウク埃及國王

第十八回國際綿業者聯合大會は埃及首都カイロのローヤル・オペラ・ハウスでファルウク王司會の下に開催された。寫眞はアブデル・モネイム埃及首相以下政府要人を率ゐて臨席されるファルウク王。

寫眞募集規定

内閣情報部

中欧協定成立

去る一月廿一日ハンガリーブダペストで伊墺洪三國協定に署名するオーストリア代表シュシュニツグ首相とイタリー代表チアノ外相(左)。この協定により墺洪二國は直ちに日獨伊防共協定に參加するものではないが、スペインのフランコ政權を承認することになつた。

寫眞週報(禁轉載)
昭和十三年三月九日印刷發行
編輯兼發行者 内閣情報部 東京市麹町區永田町 内閣總理大臣官舍内
印刷者 印刷所 大日本印刷株式會社 東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二番地

定價	發賣	申込所
一部 十錢 一ケ年(前金) 四圓八十錢 送料不要 一ケ年分未滿配送御希望の方は一部十錢の割合を以て前金を添へ左記へ御申込み下さい。	寫眞週報配送部	全國各地官報販賣所 東京都書籍株式會社 最寄書店・驛賣店 寫眞材料店

今週のキヤメラ

- 表紙(歩兵第三聯隊) 特寫
- 皇軍戰史(亡き父親の血を訪ねて) 陸軍省
- 西南役
- 日清戰爭
- 日露戰爭
- 欧洲大戰參加
- シベリア出兵
- 激戰・事變下の初年兵 特寫
- 海の彼方 同盟通信社

寫眞週報　昭和十三年三月十二日　第三種郵便物認可　昭和十三年三月九日發行（隔週一回火曜日發行）　第四號

日東紡績株式會社

東京營業所　東京市京橋三丁目・片倉ビル内
名古屋營業所　名古屋市中川區八熊町
大阪營業所　大阪市北濱二丁目・片倉ビル内

（本書の大きさは國定規格A4・週報一倍半）

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/